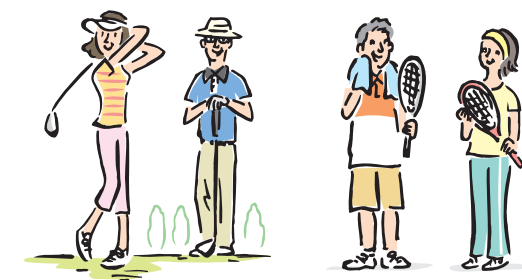


人生、楽しく。
とにかく楽しく。

3



セカンドライフをエンジョイするために「誰と」「どこ」のように「暮らすのか」ということが、とても重要です。まず「どこ」については、「定年後に住む場所を変えたい」と考える人が増えています。たとえば、電通の中高年調査・理想の暮らし(2005年)によると、団塊世代で、田舎や国内外リゾートと都会を行き来する生活を希望する人が52%、田舎暮らしが23%、国内リゾートが11%となっています。また、読売広告社の調査では、首都圏に住む団塊世代の35%が「現在の住まいから住み替えたい」という意向を持っており、住み替え希望エリアは、「現住居の近く」が36%、「地方や田舎」が26%、「都心部・中心部」が20%で、左記グラフのように男性は自然が豊かな田舎で釣りや野菜づくりで

セカンドライフに最も重要なものは仲間が見つかる新たなコミュニティ

50歳を過ぎて定年までのカウントダウンが始まったら、楽しくて充実したセカンドライフを送るためのライフプランを設計し、それにファイナンシャルプランを一致させていかねばならない。その方法として大前氏が提案するのは「家売って住む場所を変える」こと。では、住む場所を変える場合は、何を重視すればよいのだろうか。



■大前 研一 (おおまえ けんいち)
(プロフィール)
1943年福岡県生まれ。日立製作所勤務を経て、72年に経営コンサルティング会社マッキンゼー・アンド・カンパニー・インク入社。本社ディレクター、日本支社長、アジア太平洋地区会長を歴任し、95年に退社。以後も世界の大手企業やアジア・太平洋における国家レベルのアドバイザーとして幅広く活躍するとともに、「ホーダレス経済学」と「地域国家論」の提唱者としてグローバルな視点と大胆な発想で活発な提言を行っている。現在は、ビジネス・ブレイクスルー代表取締役、ビジネス・ブレイクスルー大学院大学学長などを務める。趣味はクラリネット、オフロードバイク、スキー、ジェットスキー、スキューバダイビングと多彩。著書は「旅の極意・人生の極意」(講談社)など多数。

もしながらのんびり暮らしたいと思っている人が多く、女性はショッピングやグルメ、音楽・映画鑑賞、習い事などが日常的に楽しめる便利な都心暮らしを望む人の割合が高くなっています。

「定年後は夫婦で仲良く」が団塊世代の圧倒的多数

「誰と」「どのように」は、先ほどの読売広告社の調査だと「配偶者」が91%を占め、以下は「子供」が28%、「親」が11%、「二人で暮らす」が4%です。ただし、男女別に見ると「配偶者」は男性95%・女性87%、「親」は男性16%・女性7%、「二人で暮らす」は男性7%・女性0%。夫婦間の思いには多少のギャップがあります。というわけで、定年後に住む場所を変える場合、「どこで」は男女で志向が違っているので、おき、「誰

と」「どのように」は「できるだけ夫婦で仲良く」が圧倒的なマジョリティと言えます。したがって、夫婦がお互いに満足できる暮らし方を定年までに準備しておくことが大事だと思います。でも、それは実際にはなかなか難しい。私自身、妻とは音楽という共通の趣味がありますが、私が大好きなオフロードバイクやスキーモビルに妻は興味がありません。このため、オフロードバイクやスキーモビルは同好の友人たちと楽しんでいきます。

住む地にも別荘地にもコミュニティがない

ところが、世の男性の場合はずっと会社人間で過ごしてきた、会社以外に友達のない人が多い(女性の場合は女友達同士で旅行や同じ趣味を楽しんでいる人が多い)ので

ですが、。自宅の近所で楽しみを見つけようにも、都会の住宅地にコミュニティはないから、親しい人はほとんどいない。学校時代の友達とは地理的に散らばってしまっている。となると、一人でできる盆栽や犬の散歩ぐらいしか選択肢がありません。

だから大半の男性は、おのずと定年退職後も会社の仲間と付き合い合っていくことになります。しかし、昔の同僚を集めても、ゴルフ、麻雀、カラオケ以外には楽しみ方がわからないし、思い出しても3日で尽きて、あとは話すこともなくなってしまうでしょう。

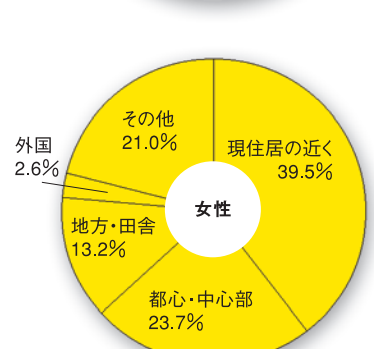
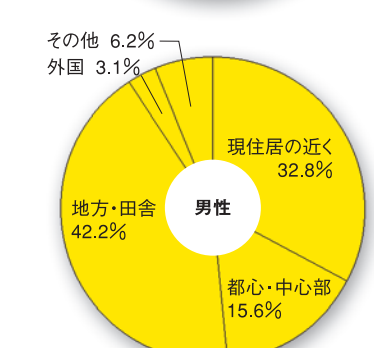
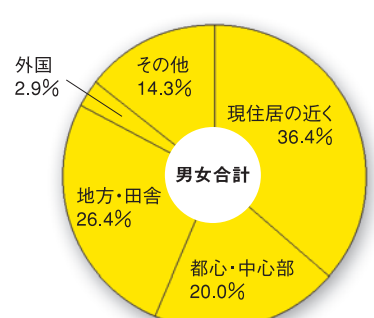
軽井沢、蓼科、熱海、伊豆高原、那須などの別荘地にもコミュニティはありません。私自身や私の友人たちも含め、近所付き合いどころか、隣の別荘の持ち主とさえ交

流のない人がほとんどです。せいぜい同じ場所に別荘を持っている東京の仲間が、パケーションの時にたまに向こうで集まるだけ。これではいくら別荘を持っていても、楽しくて充実したセカンドライフにはなりません。

私に言わせれば、セカンドライフの一番の「ご馳走」は、コミュニティとそこでの仲間です。同じ世代、同ライフスタイル、同じ趣味・嗜好の人たちがたくさん集まることができれば、絶対に楽しいはず。毎日の生活リズムがで

きるし、仲間たちと定期的に旅行に出かけるようになったり、イベントを開催するようになったりしたら、それが目標となって生活に張りが出ます。配偶者と趣味や嗜好を無理に合わせるのではなく、お互いに自分自身が好きなこと、興味や関心があることを追求できる環境は、夫婦関係にもプラスになると思います。

■首都圏に住む団塊世代「住み替え意向」
※データ出典先「読売広告社都市生活研究局」



残念ながら、まだ日本にはそのようなアクティブシニアのコミュニティは、とても少ない。しかし、アメリカでは40年も前に誕生し、その後もどんどん増え続けています。今回は、アメリカのアクティブシニアタウンについて詳しく紹介したいと思います。

KENICHI